

## 映像作品から読み解く喫茶店の社会学

塚本 ※※※  
※※※ TSUKAMOTO

中京大学現代社会学部現代社会学科  
学籍番号 C11\*\*\*\*\*

### 1. はじめに：研究主題（私の関心）

名古屋では喫茶店文化が盛んだといわれている。特に愛知県の一宮市がモーニングという文化で有名である。そんな一宮市の隣の稲沢市に住んでいる私としては喫茶店とは日常の一部であり、珍しいという感覚は全くなかった。だからこそ、映像作品に映る喫茶店の姿にたびたび疑問に思うことがある。運命の出会い、事件の推理、そんなこと私の周りの喫茶店で、あったらあったで驚きであるが、起こったことは一度もない。私の経験する喫茶店から考えるとデフォルトされたもののように感じてならないのだ。そこで映像作品の描く喫茶店とは人々の理想に近いものなのではないかと私は推論した。そんな些細な違和感から映像作品の喫茶店に興味を持ち研究を行う次第に至った。

### 2. 喫茶店の歴史

そもそも喫茶店とは1650年の“コーヒー・ハウス”が起源といわれている。これはヨーロッパ初であり、新聞や雑誌を読んだり、政治を論じたりと男社会の交流場であった。コーヒーとタバコ片手に討論している絵は歴史の教科書に載るほど、イギリス民主主義に大きな影響を与えるものとなった。『名古屋の喫茶店』（大竹敏之, 2010）に、とある喫茶店のマスターのインタビューにこのような言葉が残されていた。

「コーヒーには他者を結び付ける力がある。コーヒーを介して対話することで自然と心が通い合えるんです。」

会議室や図書館ではなく“喫茶店という場所でコーヒーを飲みながら話し合う”とい

う点に社会を変えてしまうほどの新たなアイデアを導くポイントが 1600 年代から親しまれていたのである。

世界の歴史を学んだところで、次に日本の喫茶店の歴史をたどってみよう。日本では戦前に鄭永慶によってつくられた可否茶館（かひさかん）がはじめとされている。これは“コーヒーを飲みながら知識を吸収し、文化交流をする場”としてつくられ、トランプやビリヤード、いろいろな国の書籍、シャワールームまでもが設備されていた。これは現在の喫茶店の基盤となっているのではないか。現在、喫茶店と呼ばれる店には、大量の本、しかも様々な種類の本 - 新聞、週刊誌、女性誌、旅雑誌、週刊漫画雑誌 - がおかれている。また、戦後に流行った“インベーダーゲーム”という、喫茶店のテーブルにゲームが内蔵されているものも文化交流の点であてはまる。つまり、人々は喫茶店でコーヒーを飲むだけでなく、ゲームをするついでにコーヒーを飲んでいたのでないか。あくまでコーヒーとはおまけ的な存在であったのではないか。私の友人には「コーヒーを飲むならマクドナルドに行くよ。喫茶店は高いからね。」と述べている人もいた。たしかに最近では 100 円で飲めるリーズナブルなモノから、フレーバーコーヒーといった様々な種類のコーヒーがマクドナルドには販売されている。さらにはコーヒーを飲むだけなら、缶コーヒーという手もあるし、他のファストフードにも安くおいしいものがある。ここからうかがえるのは、人々はコーヒーを飲むといった目的よりは、何か別の目的を持って喫茶店を利用しているように感じる。喫茶店にはさまざまな利用価値がある。飲食はもちろん、次の章で詳しく紹介する一宮市のように会社の応接間の代わりになったり、会議室になったり、はたまた図書館や寝室にもなったりする。つまり個人の空間、パーソナルな空間にもフォーマルな空間にも、使い方次第で変化させることができる。その自分のテーブルという限られたかつ自由な空間を人々は求め喫茶店にやってくるのだ。

### 3. 名古屋の喫茶店

次に、名古屋の喫茶店で有名な“モーニング”の歴史に焦点を当ててみたいと思う。そもそもモーニングとはコーヒー1杯の値段にサービスとして豆やあられ、またドリンク料金に 300 円くらいを追加してパンやゆで卵、サラダといったものが出てくるサービスのことである。愛知県の中で特に有名なのが、織物産業が盛んな一宮市である。なぜ一宮市が喫茶店文化で栄えたかという点、織物産業が盛んであったという点にヒントが隠されている。繊維産業において商談とは大切なものであるが、当時の機織り工場は機織機のひど

い騒音で商談できるような状況ではなかった。そこで、近くの喫茶店に場所を移し商談を進めるようになった。一宮市の喫茶店ではそのような利用客が多かったために、コーヒーに豆をサービスとしてつけたのがモーニングの原点である。こうして、商談目的のビジネスマンの利用が大半を占めるようになり、仕事での情報収集を目的とした新聞や雑誌の充実を図ったり、忙しい朝の為に朝ご飯の代わりとして、コーヒーと一緒に軽い食事を出したりするようになった。これが発展して、のちの名古屋を代表するモーニングが誕生した。また当時、一宮市の土地代が安かったという点も、たくさんの喫茶店が存在する一つの理由である。

最近では、愛知県にとどまらず全国にこのモーニング文化が広まってきている。しかし、現在都市部や大規模な駅を除けば朝のモーニングサービスを利用しているのはビジネスマンというよりは、むしろファミリー層なのである。しかもそのファミリーの内訳には、祖父母世代が多く含まれていることが目につく。“朝食は親子 3 世代そろって喫茶店でモーニング”という家族が多いように感じた。つまり、モーニングは一種のファミリーレストラン的機能をもちだしたのではないか。ドリンク 1 杯の価格で個人のニーズに合わせたバリエーションの豊富さ、そして様々な雑誌や家族間交流、果てには他の家族や親戚との交流も可能だ。このような実例がある。近所のコメダ珈琲店に、買い物帰りの父・母・私（娘）で寄った。そこで私が小学生の時に仲のよかった 1 つ上の近所のお姉さんに久々に再開した。そのお姉さんも父・母・祖母・お姉さんの 3 世代で喫茶店を利用していたのである。久々の再開であったにもかかわらず、誰しもが顔なじみでしばらくおしゃべりにふけたものである。このように家族ぐるみの交流が、喫茶店で意図も簡単に行われてしまうのである。安くて、早くて、おいしくて、たのしい。これら 4 大要素がモーニングには含まれている。特に週末の喫茶店は朝の 7:00、早いところでは 5:00 ぐらいから営業しており、家族の朝ご飯の時間に浸透している。また昼近くまでモーニングが出る店も少なくないので、休日のランチとしても、もってこいなのである。

現在では、モーニングは喫茶店だけのものではなくなってきている。うどん屋ではうどんを、カレー屋ではカレーを用いたバリエーション豊かなモーニングが存在する。コーヒーを楽しむためではなく朝食としてモーニングは親しまれてきている。さらにモーニングというと朝にしか出ないイメージであるが、開店から閉店までずっとモーニングをやっている店や、アフタヌーンサービスとして午後にはパンケーキやアイスクリームを提供する店もある。ちなみにお気に入りの“池田屋珈琲店”という喫茶店では、このアフタヌー

ンサービスでドラ焼き・みたらし団子・あんみつ・フレンチトースト・アイスクリームといった 5 種類もある。このようにモーニングも含めて様々なサービスは、その店を特徴づける一つの媒体として生き生きと存在している。

名古屋の喫茶店とは我々に深く根付いている存在である。朝の喫茶店はモーニングを求めて満員であり、オリジナル商品などで各店舗にこだわりがあり、日々進化している。

#### 4. 映像作品から見る喫茶店

ここで最近の映画から読み取れる喫茶店像を検証してみようと思う。2012年1月31日に全国ロードショーをした“しあわせのパン”という映画がある。あらすじは北海道・月浦に、おいしいコーヒーと焼き立てパンをだす宿泊施設を備えたパンカフェ“マーニ”を営む夫婦の話。マーニには、春夏秋冬で様々な人々が訪れる。

最初のお客様は失恋した女性。沖縄に新婚旅行の予定であったが直前で彼と別れてしまい、意識的に沖縄とは真逆の北海道へとやってきた。友達に電話で「沖縄最高だよ」といった強がりを最初はみせていたものの、そんな自分に嫌気がさしていた。そんなとき「素朴なパンもいいですよ」と女主人の一言とさしだされた焼き立てのパンと淹れたてのコーヒー。そして彼女は本当の気持ちをさらけ出すことができるようになる。最後に失恋した彼女はこの店で癒され、このお店で最高の出会いをする。

次のお客様は、この喫茶店で真実を見つける。男女関係のもつれにより夫婦喧嘩の末、お母さんが出て行ってしまったが、父は子供にそのことをはっきりと告げることができない。しかし子供は、お母さんは別の男と出て行った事実気付いているにもかかわらず、父に聞くことができない。そんなすれ違う親子が喫茶店を通して事実を打ち明け合い、絆を深めていった。

最後のお客様はマーニに来たことによって明日を見つけることができた。余命いくばくもない妻とともに訪れた老人。この老夫婦は若いころに子供を亡くし、その子の名の由来でもある月浦で共に心中しようとしてきた。しかしそこで、パンを食べないはずの妻が、「明日もこのパンを食べたい」と、明日をみつめだすきっかけとなる。この老夫婦は1週間ほど滞在し、一緒にパン作りを体験したり、近所の住人とともにパーティーをして過ごしたりなど楽しい時間を過ごす。冬が終わり春になるころ、妻が死んだことを手紙で知るが、最後に楽しい時を過ごすことができた感謝される。

この映画では、喫茶店は様々な描かれ方をしている。出会い、絆、未来といった明るいワードを連想させるようなアットホームな感じである。この物語の主人公はもともと喫茶店を開いていたわけではなく、東京で生活していたが、その生活に疲れを感じ北海道へ行くことになる。これは現代のストレスや不況の状況に当てはまっており、そのように疲れた人々に向けての“癒しの場＝喫茶店”という図式が浮かび上がってくるのではないか。

確かに、この映画のように壮大な出来事は、起こることはまずない。喫茶店に入る、注文する、受け取って、自分の時間を過ごす、お会計、店を出る。この淡々とした流れの繰り返しだ。しかし、よく考えてみると喫茶店の原点であるコーヒー・ハウスは、もともと政治を論じたりする男性の社交の場であった。娯楽として使われたコーヒー・ハウス、つまり、その空間には他人を排除する概念が極端に薄くなるのである。出会いがあると、いったんは原点のころから現在でも変わっていないように感じる。豊田市駅の近くのGAZAという複合型スーパーに、カウンター席が7席ぐらいの小さな喫茶店が含まれている。いつもコーヒーを入れているのは決まった男女。推測ではあるが、夫婦と思われる。その店は小さいながらもにぎわいをみせていることが多く、満席になっていることもあるぐらいである。ある日、不思議な光景にであう。カウンターには一人の初老男性と、隣同士で座る買い物終わりのマダム2人組。客3人とマスターらしき男性が楽しそうに談笑しているが、客の男性とマダム2人組の間には一席の空席があった。もし3人がもともと知り合いならば3人並んで座るのが普通であろうに。つまり、客の男性とマダム2人組はもともと知り合いではなかったのではないか。何らかがきっかけとなり、見知らぬ人同士が繋がれた。これぞ喫茶店マジックなのかもしれない。しかし、どこの喫茶店でもこのようなことが起こるとは考えにくい。これは7席しかない小さな店であったこと、カウンター席という比較的個人の空間になりづらい環境であったこと、などが関係してくると思われる。ここで映画の話に戻ると、マーニにもカウンター席があった。カウンター席は一人のお客様用の席に思われがちだが、もしかしたら最も他人との距離感が近い、もしくは縮まる席なのかもしれない。自然とコーヒーを入れてもらう側と入れる側が対面し、会話がなくとも表情、動作、視線などは相手にまるわかりである。このように喫茶店には出会いを生み出しやすい要素がたくさん含まれているのだ。

また淡々とした日々を求めるものがこの映画には詰まっている。新しい出会いが欲しい、家族や会社といった枠を捨てた自分を持てる空間。喫茶店を訪れた自分は何者でもないのだ。最初にやってきた失恋した女性も、ちぐはぐだった親子も、老夫婦も喫茶店にや

ってきて“本当の自分”“本当に大切なこと”に気付いた。また、この映画のうたい文句である“わけあうたびに、わかりあえる気がする”というものがあるが、それを象徴するように何度もパンを分け合うシーンが描かれている。パンを裂く音。「はいっ」と渡すときの小さな声。それに答えるような「ありがとう」。そのたびに、つながる。それはコーヒーにも言えることだと思う。心をこめて入れたコーヒーを提供する、またはされるたびに、知らず知らずのうちにつながり合っているのかもしれない。

また、この映画では郵便配達の青年が日課としてコーヒーとパンを食べていく。そして夫婦に見送られながら、本来の仕事へと戻っていく。つまり、仕事のはざまの空間ともいえる。仕事中にコーヒーを飲む人はたくさんいるであろう。下記の表を見てもらいたい。

家庭・職場でのコーヒーの需要は年々増加傾向をみせ、1983年から2006年の23年間で2.5ポイントも増加した。これは他の項目のレストラン、喫茶店・カフェ、その他の中で最も大きい伸び率である。仕事の疲れを癒す効果、気分転換に用いられるのであろう。これはコーヒーに含まれるカフェインが大きく関係してくる。カフェインは人の中枢神経を興奮させ、覚せい効果がある。仕事中にコーヒーを飲むことは理にかなった行為なのである。またコーヒーの香りには脳を刺激する効果があり、インスタントコーヒーよりもドリップ式のコーヒーのほうがより効果がある。映画内の郵便配達員も、毎朝

年	家庭・職場	レストラン等	喫茶店・カフェ	その他
1983年 (昭和58年)	6.8	0.1	1.1	0.5
1985年 (昭和60年)	7.22	0.1	1.05	0.65
1990年 (平成2年)	7.99	0.11	0.88	0.92
1996年 (平成8年)	8.96	0.18	0.69	0.96
2000年 (平成12年)	9.47	0.17	0.52	0.88
2002年 (平成14年)	8.77	0.14	0.34	0.76
2004年 (平成16年)	9.11	0.12	0.38	0.76
2006年 (平成18年)	9.16	0.11	0.33	0.93

ニでいれたてのコーヒーの香りをかいで、コーヒーを飲むことには1日の仕事をはかどらせていたのではないか。また雑誌“珈琲時間”2012年2月号に載っている東京・南青山の蔦珈琲店のマスターはこう語っている。

「僕が思う喫茶店のイメージは職場と家の中間点。ここから自宅や職場へ出かけて、ここへ戻る」

つまり、人の人生喫茶店にあり。魂のような考え方だと思う。家庭に戻れば、家庭内

の役職があり、職場では自分を殺してせつせと働く。自分の役割を演じ疲れた時に喫茶店に入れば、自分は違う自分になる。本当の自分に出会える、見つける、気付く、喫茶店はそんな場であるのかもしれない。

次に紹介するのは2012年1月に放送されていたドラマ“早海さんと呼ばれる日”から喫茶店を読み解いてみたいと思う。このドラマの主人公は早海家に嫁入りするユリコ。しかし、嫁入りと同時に早海家の母であるヨウコが家を出てしまう。これまで母に頼りきりだった父や息子たちはどんどん不仲になっていく。そんな家族を見て、ユリコはヨウコの代わりになる！と宣言。この早海家の夫婦が喫茶店“ガテマラ”を営んでいる。ドラマは喫茶店とともに家族の成長を描いている。

1話では母が出て行ったと同時に父が無気力となり、喫茶店を休業しだす。この夫婦の営む喫茶店とは昭和の雰囲気のでた内装である。4組ぐらいのソファ席。木目調であるが、清潔さというよりも時間の流れを感じさせる家具たち。カウンター席もちろんある。またガテマラという店名は、グアテマラ産コーヒーのことであり、上品な酸味とバランスのとれた苦みと香りがあり、ブレンド用の高級品として用いられる。このことからコーヒーにもこだわりを持って提供していたのではないかと思われる。

特に2話に父との感情とリンクした喫茶店が描かれている。休業の張り紙を見た商店街の常連さん2人がやってくる。ヨウコが出て行ったことを知らないで、なぜ店を再開させないのか、ヨウコのランチが食べたいなど好き放題いわれ、父は余計ふてくされてしまう。ここでの話はカウンターで3人並んで会話が行われる。コーヒー自体は出てこないが、大の大人が3人身を寄せ合って話す姿は距離感が近いことを感じさせた。ソファ席だってあるのにも関わらず、カウンター席というポイントが“しあわせのパン”の時同様にあるのかもしれない。

ここで大事件が起きてしまう。喫茶店で使われていた鉄のフライパンをユリコがよかれと思って洗ってしまう。しかしこのフライパンは開業当時から油をなじませて大事に使ってきたものであった。それを知った父はユリコに対して激怒する。商店街の常連さんが帰った後、喫茶店のキッチンでランチをつくるヨウコの姿を幻覚で見てしまうほど父にとっては“鉄のフライパン＝母の分身”という意識が強かったのだと思う。先の話になるが、父一人で喫茶店を再開させた際にランチは再開されなかった。これより、ランチを担当していたのは母・ヨウコであり、父はあまり関与していなかったのによりヨウコのイメージ

が強かったのではないか。このように早海夫妻にとっては、喫茶店はその夫妻の歴史である。それを象徴するようなセリフとしてこんなものがある。

(慣れない家事で失敗してしまい、家族から責められユリコが家を飛び出した後)

長男「ユリコにきかれたんだよ。お母さんの席はどこなの？お母さんいつご飯食べていたの？俺さ、答えられなかったよ。35年もこの家にいてさ、知らなかったんだよ。母さんがいつご飯ってたのか。人の気持ちがわからないってさ、俺たちだって母さんの気持ち分からなかったろ。」

このセリフの後、父が逃げるように喫茶店へ向かいタバコを一吹きする。その時に回想で朝、忙しく家族のために働きまわる母は、そのまま仕事場である喫茶店へ向かいお客の相手を一人でしながら、遅めの朝食をキッチンの隅っこで急いで頬張るシーンが入る。先ほど夫婦の歴史といったが必ずしもいいものだけではない。喫茶店では明るくお客にふるまっていたヨウコも実際のところ、家庭と仕事のはざままで疲れ切っていた。こうした家族関係を喫茶店を利用してうまく表現していた。このあとユリコを嫁として認める際に、父はフライパンに再び油を塗る。母がいなくなってしまった喪失感をフライパンの油を引き直すことで少し吹っ切れる、というか新たな一歩を踏み出すきっかけとして描かれていたのではないかと思う。

このように“しあわせのパン”と違うのは出会い・希望といったポジティブな印象というよりは、庶民的でリアルな描かれ方をしていた。近所の人が常連さんというの是一緒だが登場する年齢層も二つで違う。“しあわせのパン”では基本的に若い年齢層が来店する。老人でもスーツやおしゃれな服を着ている。白を基調として、窓も広く太陽の光がたくさん入る、そんな明るい店内。だが“早海さんが呼ばれる日”の喫茶店ガテマラの来店客層は基本商店街の50～60歳近い白髪交じりのおじさん。服装もスウェットやジャージのような動きやすく、ディスカウントショップなどで売られていそうな物である。店内も薄暗い感じで、色合いもくすんだ感じであった。このような印象の違いは、普段私たちが“喫茶店”と“カフェ”との使い分けに大きく影響しているのではないか。喫茶店を辞書で引くと“コーヒーや紅茶などの飲み物、または軽食を出す店。カフェ。”とされている。ここで一つ疑問に思うのが喫茶店＝カフェという図式である。確かに形式的にどちらも飲み



物・食べ物を提供する店であるが、私たちは知らず知らずのうちに“喫茶店”と“カフェ”という単語を使い分けているのだ。確かに最近、同大学の学生に対してコーヒーを飲むといったらどこ？という簡単な質問に対して「スタバ（スターバックスコーヒー）」「ドトール」「タリーズ」といったセルフサービスのカフェの名前が多々あがった。おしゃれな雰囲気を出しており、比較的利用年齢層が若いのがカフェ。近所の人々が集まったりするなど、カフェより他人への排除感が薄まるノスタルジックな空間を喫茶店というのではないか。

喫茶店をメインとした映像作品ではどちらかというところ、“いつまでも変わらないもの”として描かれていることが多く、人々もそれを理想としているのではないか。変わっていく自分と、変わらない喫茶店。人生を重ね合わせて、まるで小さいころ柱につけた傷のように、少しずつ成長を見守ってくれる存在であってほしい。喫茶店という空間において行われる行為には人間の深みが現れていると思う。個々で求める空間は違うけれど、求める空間があるという事実は同じである。人々が求め続ける限り、喫茶店は今日も変わらず、あなたに最高の空間とコーヒーを提供し続けるのではないか。

## 5. 喫茶店の TV ドラマ的効果

今日の TV ドラマには様々なシーンで喫茶店が登場する。これまでは、喫茶店を題材にした、つまり喫茶店が主人公といっても過言ではない作品を紹介してきた。しかしながら、当然ではあるが必ずしも喫茶店がメインなわけではない。ここで、話の流れの中のほんの脇役として登場する喫茶店の効果を考察してみたいと思う。

### ▼調査方法

以下の作品の喫茶店のシーンをトランスクリプトし、TV ドラマの中でどのように喫茶店が描かれているかを研究する。

「妄想捜査 桑潟幸一教授のスタイリッシュな生活 #2」

「ラッキーセブン #6」

「リーガルハイ #2」

「クレオパトラな女たち #3」

### 1: 人物キャラ付け効果

まず一つ目にあげられる特徴として“人物キャラ付け効果”があげられる。これは喫茶店での行動が、よりそのキャラクターを引き立てる、またはそのキャラクターの心情を表現しているということである。ここでは二つ例をあげよう。

弁護士：カサイサトシのゴーストライターのお一人ですよ。バンド活動をやめ、昼はピアノの先生、夜は飲食店でアルバイト。そこで偶然カサイサトシさんに出会った。捨てていたはずの音楽への思いが再燃し、自作の曲を売り込んだ。何曲かは一部採用になり、いくらかのギャランティを手に入れた。あるいは、見向きもされなかった自分の歌が、カサイマサトの名がついたとたん、日本中で聞かれるようになり、ひそかな快感を覚えたか。しかし、君は採用されたいあまり、荒川ポニータに作った曲にまで手を出した。それが“あれは恋でした”だった。違いますか？

<終始ケーキを食べながら>

助手：ポニータさんはあなたの親友でしょ？歌をつくる苦勞はご存じのはずなのに。法廷で証言してもらえますね。

容疑：はい。証言します。

助手：ありがとうございます。

弁護士：<女性の顔をまじまじと見ながらイチゴを頬張る>

容疑：<思いつめた顔でカップを一口>

(リーガルハイ #2 より)

ここで弁護士と表記されている人物は、自由奔放なおぼっちゃまで金は何よりも大好き、裁判に勝つためならば手段を選ばない性格である。しかし、頭のキレはピカイチで自分のしたいように人生を謳歌してきたような人物だ。注目していただきたいのは終始ケーキを食べながら話すという場面である。この場面の話の内容は盗作の疑惑のかかった女との会話であり、真剣な話なのである。そんな中でケーキをパクパクと食べながら、坦々と追い詰めていく姿は、このワンシーンからでも彼の性格が十分に読み取れるのではないか。彼はただ裁判に勝つために、女を追い詰める。女に向けられる感情はない。最後に彼女を見たのは証言をすることを認めた時であるが、この時の彼の表情はみじんも彼女を信じてはいなかった。これもあくまで、イチゴを食べながらではあるが。

<妹店員：ぐるぐるとカップの中身をかき回して、一気にコーヒーをあおる>

先生：元気そうでよかったです。

妹店員：元気じゃないわよ。私、何も変わらないの。顔も変わったし、ヘアースタイルも洋服もみんな変えたけど何も変わらない。手術にお金がかかったから家も出られないし、今でも姉のほうが威張ってるし、私は姉の言いなりだし、親は姉の言うことしか信用しないし。どうしたらいい？

先生：そんなこと僕に言われても。

(クレオパトラな女たち#3より)

このシーンでは妹店員の心情が行動を見るだけで読み取ることができる。コーヒーをぐるぐるかき回して、味を楽しむどころか、一気に飲み干してしまう。妹にはコーヒーを楽しむ心の余裕は全くない状況なのである。そのあとに続く会話を見れば妹は心にゆとりのあることは明白だ。このようにコーヒーは味を楽しむものであるように見えて、そのキャラクターの性格がにじみ出す効果のある一杯なのかもしれない。

## 2：場所特定効果

次にあげられる効果として“場所特定効果”がある。これは登場する喫茶店の雰囲気とその街、その場所を实によく表すという効果である。考察した映像作品の喫茶店の雰囲気と、その喫茶店のある場所を以下の表にまとめてみた。

	場所	雰囲気
妄想捜査	商店街	ノスタルジック
ラッキーセブン	ビル内接	アンティーク
リーガルハイ	ビル内接	カジュアル
クレオパトラ	ビル1階	カジュアル

映像研究に使った資料の中で喫茶店がある場所もさまざまである。上の表はそれぞれの作品の喫茶店のある場所とその雰囲気をまとめたものである。妄想捜査では昔ながらの商店街にあるノスタルジックな雰囲気をまとめた学生街の喫茶店をイメージしたような喫茶店が描かれている。妄想捜査は大学をメインに事件が起こる話なので、ドラマの雰囲気にもぴったりの場所である。ラッキーセブン、リーガルハイはどちらも場所としてはビルに内接された喫茶店であるが描かれ方の違いによって雰囲気は大きく異なるものになって

いる。ラッキーセブンでは自分だけの隠れ家的喫茶店というコンセプトが登場人物の言動から見てとることができる。

女1：あれ？ジュンペイさん？どうしているんですか？

男1：なんでいちゃだめなんだよ？

女1：あたし一人の憩いの場所が・・・

(ラッキーセブンより)

すなわち、喫茶店中もアンティーク調でマスターのこだわりが強い喫茶店が描かれている。マスターの趣味であろう、航空士の専門学校のポスターや飛行機のプラモデルを置くなほんの数秒の間にもさりげなくマスターのこだわりが表現されている。一方のリーガルハイでは同じビル内ではあるがカジュアルな喫茶店であり、あくまで話の内容にかかわりがないことから特徴は感じられない。喫茶店には『琥珀色の記憶-時代を彩った喫茶店-』（奥原哲志，2002）にも述べられているように、画一的な設備とサービスを提供する、すなわちチェーン店的存在と店主の喫茶店への思いを反映させた特色のある店とに分かれる。特に後者は近年、カフェ本といった、さまざまな地域に点在する個性あふれるよりすぐりのカフェを集めた本が出るほど、注目を集めている。

一方クレオパトラな女たちでは近代の街中にある美容整形外科が舞台であるので、描かれる喫茶店もセルフ式チェーン店が描かれていた。また喫茶店を利用する客層もサラリーマン、学生といった都市的なイメージをまとったエキストラがその街を作り上げている。

このように個人の中に、ある特定の場所にあるべき、ないしはあってほしい喫茶店のイメージは少しずつ違うものである。それを巧みに利用することで、そのドラマの世界観をよりリアルに深みのあるものになっている。

### 3：話の転換効果

そして最後にあげるのが“話の転換効果”である。これは、ドラマを全体的に見通して喫茶店のシーンがどこに使われているかということ調べることで、話の転換に使われていることが分かった。

助手：あなた昔パンクバンドやってたでしょ

とも：何言ってるのよ

助手：だってあの写真、ともこだったもの

桑潟：えっうそ、あの写真がともこちゃん？

とも：・・・何言ってるのかさっぱり

助手：どんなメイクしてても、輪郭と鼻だけはごまかせない。それと声の張り上げ方。

（回想シーン とも：おりゃーお前らいくぞー）

とも：お願い、恥ずかしいから誰にも言わないで

助手：じゃあ、何があったのか恥ずかしがらずに話して

<お湯が沸いているサイフォンが写る>

とも：・・・クワガタ先生の手帳をとったのはあたしです。

桑潟：え！？

（妄想捜査より）

弁護：カサイサトシのゴーストライターのお一人ですよ。バンド活動をやめ、昼はピアノの先生、夜は飲食店でアルバイト。そこで偶然サカイサトシさんに出会った。捨てていたはずの音楽への思いが再燃し、自作の曲を売り込んだ。何曲かは一部採用になり、いくらかのギャランティを手に入れた。あるいは、見向きもされなかった自分の歌が、カサイマサトの名がついたとたん、日本中で聞かれるようになり、ひそかな快感を覚えたか。しかし、君は採用されたいあまり、荒川ボニータに作った曲にまで手を出した。それが“あれは恋でした”だった。違いますか？

<終始ケーキを食べながら>

助手：ボニータさんはあなたの親友でしょ？歌をつくる苦勞はご存じのはずなのに。法廷で証言してもらえますね。

容疑：はい。証言します。

助手：ありがとうございます。

（リーガルハイより）

店員：私を救ってくれたのは先生だけなの。だから、今度も救って。責任とって。

先生：責任！？

店員：だって、あたしの顔変えたの先生だもん。

先生：いや！テラサキさんの希望で手術したんですよ！

店員：でも、先生の好みでしょ！この顔！あたしと付き合って。あたしの彼氏になって。

先生：ちょちょちょ、ちょっと待ってください！

店員：先生が付き合ってくれたら、今度こそあたしは変われる。幸せになれる！お姉ちゃんを越えられる！お願い！

（クレオパトラな女たちより）

このようにたかが喫茶店のシーンではあるが、話されている内容はドラマ自体のキーポイントになることが多い。喫茶店内では「えっ！まさか！」という事実を登場人物たちは淡々と述べていく。回りに他のお客さんがいようがいまいが主人公たちには関係ないのだ。テレビ画面というフレームに切り抜かれた喫茶店はあたかも、主人公たちだけの世界のように何気なく衝撃の事実を受け止めている。起承転結でいうと、承→転、転→結といった場面転換の→の部分に喫茶店が用いられているのだ。喫茶店自体では劇的なことが起こるわけではないが、嵐の前の静けさとも言おうか。喫茶店は優雅な雰囲気漂わせながら、ドラマをよりドラマティックに仕立て上げる前舞台なのだ。

## 6. むすび：研究成果（私の主張）

人の生活する空間は、スペースとプレイスという二つの分類を行うことができる。スペースとは物理的な場所を意味し、プレイスは居場所といった社会的空間概念、つながりたい場所という意味を持つ。喫茶店をメインとした話では、喫茶店はなくてはならない場所、心のあり場所というような思いを生み出しやすい。つまりプレイスなのである。では一方で話の中で随所的に使われる喫茶店はサービスや内装などにこだわりを持つというよりは、空間の提供を前提と置いたものであるから、スペース的といえる。喫茶店とはもともと、コーヒーハウスを皮切りに、社交の場、プレイス的存在であった。しかし、チェーン店の発達により社会的あり方は、個々の憩いの場から一時的な止まり木のような物理的な場所という概念が人々の中に根付いたのではないか。そんなときに喫茶店＝プレイスを押し出す映像作品や先ほど述べたカフェ本の流行は現代人の居場所探しの手助けのようにならない。

▼データベース集▼

妄想捜査—桑潟幸—准教授のスタイリッシュな生活 #2

場所：商店街の一角

雰囲気：アンティーク調の店、マスターは眼鏡で黒ベスト、ふかふかのソファ—

特徴：？釜コーヒー、こだわりのコーヒーなどと書かれたのれんが店の外にある  
店名“大江館”

時間：2分37秒

机の上：男、ホットコーヒー 女×2、アイスコーヒー

関係性：桑潟（男）、助手（女）、とも（女）

女2人は同じ大学に通っている学生、男は大学教授

その他の客：なし

助手：あなた昔パンクバンドやってたでしょ

とも：何言ってるのよ

助手：だってあの写真、ともこだったもの

桑潟：えっそう、あの写真がともこちゃん？

とも：・・・何言ってるのかさっぱり

助手：どんなメイクしてても、輪郭と鼻だけはごまかせない。それと声の張り上げ方。

（回想シーン とも：おりゃーお前らいくぞー）

とも：お願い、恥ずかしいから誰にも言わないで

助手：じゃあ、何があったのか恥ずかしがらずに話して

<お湯が沸いているサイフォンが写る>

とも：・・・クワガタ先生の手帳をとったのはあたしです。

桑潟：え！？

とも：でもあたしも被害者なんです。ちょっと前、私のバックが荒らされてて、写真がなくなっていたの。次の日の夜、写真がひっかっているのを見つけて、早くとらなきゃって思って。長い棒でつつけば何とかなるかもって思って。でも鉄の棒だったから、すごく重くて、ふらついて。写真のことみんなに知られたくなかったから。何も言えなかった。で、鉄の棒を元の場所に戻そうとしたんだけど掃除の人がいたから。オブジェのところにおいて行きました。

助手：そのあと、風によって写真は近くの草むらに落ちた。

とも：それをクワガタ先生が拾って行った。みんなにばれる前にあの写真ををり返さないと思って、手帳ごと持って行きました。手帳は捨てようかと思ったけど、ほとんど新品だったから返さなきゃって思って。それで、怪盗ジャックマンのせいになろうと思って、オブジェのところに置いてみました。

助手：このミス猫かぶりの言うことがほんとなら・・・

桑潟：問題は誰がラクロス部の部室から写真を盗んだってこと？

助手：そいつが怪盗ジャックマン！



## ラッキーセブン #6

場所：ビル内に内接された喫茶店

雰囲気：アンティーク調、テーブル1席、主がカウンター

店名：敷島珈琲

店長：眼鏡、オレンジの胸元に店名が記載されたエプロン

関係性：男1、女1、店長

男1と女1は職場の同僚。女1にとってはなじみの店

男1女1共にホットコーヒー

その他の客：なし

特徴：暖炉がある、たくさんのコーヒー豆を置いている、飛行機の模型や“よし！パイロットになるには”といったうたい文句の航空学校のポスターがある、真壁りゅう（物語中の架空ドラマ）のレトロポスターを張っている

時間：53秒、5秒

店長：いらっしゃいませ

男1：コーヒー一つ

店長：はい

男1：結構見えるんだな・・・また、あのおじさん来てるの

店長：お豆はどうしましょうか？

男1：何があるの？

店長：こちらはですね、コスタリカC000・・・

女1：あれ？ジュンペイさん？どうしているんですか？

男1：なんでいちゃだめなんだよ？

女1：あたし一人の憩いの場所が・・・

男1：え？

女1：いいえ、はいマスター

店長：ありがとう

女1：高かったよ

男 1：何？

店長：おでん缶、このこんにゃくが激うま

男 1：どういう関係？

（窓から男同士の争いが見える）

<コーヒーカップをガチャンとソーサーに落とす、近くにはコーヒーミル>

男 1：なんだありゃ

## リーガルハイ #2

場所：ビル内に内接された喫茶店

雰囲気：カジュアル

店名：？

店長：？

関係性：弁護士（男）1、助手（女）1、容疑者（女）1の3人

弁護士と助手は職場の同僚。

注文していたもの：ホット（中身は茶色）×3、ケーキ（ショートケーキ、チョコレートケーキ）×2

ケーキはショートケーキを弁護士、チョコレートケーキを助手が食していた。

その他の客：あり、店内の3分の1程度

特徴：容疑者の職場まで出向いて、そのあとに喫茶店まで移動してからのシーン。その他の客がいる中で話の内容は結構重要。その他の客はPCを開いて勉強するなど、静かな雰囲気であった。

時間：1分9秒

弁護：カサイサトシのゴーストライターのお一人ですよ。バンド活動をやめ、昼はピアノの先生、夜は飲食店でアルバイト。そこで偶然サカイサトシさんに出会った。捨てていたはずの音楽への思いが再燃し、自作の曲を売り込んだ。何曲かは一部採用になり、いくらかのギャランティを手に入れた。あるいは、見向きもされなかった自分の歌が、カサイマサトの名がついたとたん、日本中で聞かれるようになり、ひそかな快感を覚えたか。しかし、君は採用されたいあまり、荒川ポニータに作った曲にまで手を出した。それが“あれは恋でした”だった。違いますか？<終始ケーキを食べながら>

助手：ポニータさんはあなたの親友でしょ？歌をつくる苦勞はご存じのはずなのに。法廷で証言してもらえますね。

容疑：はい。証言します。

助手：ありがとうございます。

弁護：<女性の顔をまじまじと見ながらイチゴを頬張る>

容疑：<思いつめた顔でカップを一口>

### クレオパトラな女たち #3

場所：ビルの1階

雰囲気：カジュアル

店名：？

店長：？

関係性：先生（男）、男客、店員（女）

先生と男客は赤の他人で、店の常連客。先生は男性と店員のやりとりを見ていた。

注文していたもの：先生ホットコーヒー、男性カフェオレ的なマグカップ系のもの

その他の客：あり、店内の3分の1程度

特徴：半セルフ式の喫茶店。レジで注文して、席まで持ってきてもらうタイプ。席数も多く、人通りの多い通りに面している。

時間：2分20秒

男客：ああこれ、生クリーム入ってるよね？いらんって言っただろ。君、約束しなかった？毎朝来てくださってありがとうございます。クリーム抜きのは覚えておきますねって言ったんだよ君。自分から覚えておくって、調子よく言っておいてけろっと忘れてるのってなんかすごくない？

店員：すみません。お取り換えします。

男客：ちょっと待ってよ。取り替えるとかじゃなくて覚えてないのかって聞いているんだよ。言っぱなしで覚えてないとか、客を何だと思ってるんだよ。まあいいや。

先生：なぜ言わないんですか？双子だって。

（回想）

店員：お待たせいたしました！いつもありがとうございます！お客様この近くにお勤めですか？

先生：はあ

店員：どこ？

先生：そこ

店員：ふふふ、いつも通りブラック濃いめです。

（回想終了）

先生：すみません、余計なことを。

店員：い、いえ、でもなぜ双子だってことわかったんですか？

先生：なぜって、よく似てるけど、頬骨の張り出し方がちょっとだけ違うかな。

（店の前を通りかかる先生、以下店の前での話）

時間：1分30秒

店員：先生？やっぱり！うちの妹、今日クリニックに行きました？

先生：はい

店員：あの子一人じゃ何にも出来ないんです。たぶん手術なんて勇気ないので、もう行かないと思います。ご迷惑おかけしてすみません。

先生：まだわかりませんよ。でも、なんで僕があそこのクリニックで働いているってわかったんですか？あなたも。

店員：妹、先生のことつけて行ったみたい。おかしいんですあの子。適当にあしらっててください。それじゃあ。

店員：お姉ちゃんと何話してたの？

先生：え？

店員：何話してたの？

先生：え、いや、妹のことよろしくとか。

店員：わかったでしょ？姉はいつも私の邪魔をするの。

（成形後の妹に出会う、妹の勤める店へ）

その他の客：2組

注文した物：ホットコーヒー×2

時間：2分

<妹店員：ぐるぐるとカップの中身をかき回して、一気にコーヒーをあおる>

先生：元気そうでよかったです。

店員：元気じゃないわよ。私、何も変わらないの。顔も変わったし、ヘアースタイルも洋服もみんな変えたけど何も変わらない。手術にお金がかかったから家も出られないし、今でも姉のほうが威張ってるし、私は姉の言いなりだし、親は姉の言うことしか信用しないし。どうしたらいい？

先生：そんなこと僕に言われても。

店員：私を救ってくれたのは先生だけなの。だから、今度も救って。責任とって。

先生：責任！？

店員：だって、あたしの顔変えたの先生だもん。

先生：いや！テラサキさんの希望で手術したんですよ！

店員：でも、先生の好みでしょ！この顔！あたしと付き合っ。あたしの彼氏になって。

先生：ちょちょちょ、ちょっと待ってください！

店員：先生が付き合ってくれたら、今度こそあたしは変わる。幸せになれる！お姉ちゃんを越えられる！お願い！

先生：そんなことできませんよ。

店員：どうして？

先生：どうして？って、

店員：どうして？

先生：だって、男の人と暮らしてるんです僕。

店員：友達でしょ？

先生：そういうのじゃなくて。なんていうか、

店員：うそ！先生は私をあきらめさせるために言ってる

先生：嘘じゃありません！

店員：じゃあ見に行く！男の人と暮らしてるとこ

先生：ええ！

店員：そうじゃないと、先生の話信用できない。

先生：ちょっと、待ってください！

<その他の客の視線を浴びながら店を飛び出していく>

時間：10秒

(先生が店の前を通りかかる)

店員：お待たせしました！生クリーム入ってません。

男客：おお、ありがとう。

店員：でも私は夏じゃなくて、冬のほうですから。失礼します。

参考文献

- 渡辺涼（1995）『カフェ ユニークな文化の場所』  
奥原哲志（2002）『琥珀色の記憶-時代を彩った喫茶店-』  
川口葉子（2006）『カフェの扉をあける100の理由』  
産業編集センター（2008）『懐かしい町のレトロな喫茶店』  
里木陽市（2007）『学生街の喫茶店はどこに』  
大竹敏之（2010）『名古屋の喫茶店』  
大誠社（2012年冬号）『珈琲時間』

サイト

映画「しあわせのパン」公式サイト

[shiwase-pan.asmik-ace.co.jp/](http://shiwase-pan.asmik-ace.co.jp/)

早海さんと呼ばれる日 - フジテレビ

[www.fujitv.co.jp/hayamisan/](http://www.fujitv.co.jp/hayamisan/)

ウィキペディア

[ja.wikipedia.org/](http://ja.wikipedia.org/)